

公の時代における個の身体

呉宮 百合香

新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、間近に控えていた東京オリンピックが大きく延期となった。今から遡ること80年、やはり有事により中止に追い込まれたオリンピックがあった。1940年の「幻の東京オリンピック」である。大震災、改元、オリンピックと万国博覧会、そして未曾有の危機による自粛ムード——当時と現在の日本を取り巻く状況に少なからぬ符合があることもまた、それが単なる偶然に過ぎないにしても、私たちの意識のうちに暗い影を落としている。

2018年に初演された木野彩子のレクチャーパフォーマンス『ダンスハ體育ナリ？其ノ二 建国体操ヲ踊ッテミタ』は、その点において予言的な作品であった。東京オリンピックを縦軸、体操を横軸に、近代の日本が目指してきた身体のあり方を明らかにする本作は、歴史を顧みること、現在の再認識を促す。

幻の東京オリンピックと体操ブーム¹

『ダンスハ體育ナリ？其ノ二 建国体操ヲ踊ッテミタ』（以下『建国体操ヲ踊ッテミタ』）は、元中高保健体育教員で、現在は大学で教職に就くダンサー木野彩子によるレクチャーパフォーマンスシリーズの第2作目にあたる²。「ダンスはなぜ体育の授業で教えられているのか？」という問いに発し、写真や映像、新聞雑誌記事、音楽等の丹念なリサーチから作られた本作は、2018年2月11日に、建設が進む新国立競技場のすぐ隣、明治神宮外苑聖徳記念絵画館で初演され、その時その場の話題を取り入れ内容を更新しながら、これまでに3度の再演を重ねてきた。

その内容の要点を駆け足でさらしてみたい³。

学校体育の始まりは、明治期に遡る。富国強兵を目指す明治政府が、西洋の近代国家にならっ

¹ 以下に続く「幻の東京オリンピックと体操ブーム」と「大日本帝国憲法下の『滅私奉公』の身体」の項に含まれる引用のうち、特記のないものはすべて木野彩子『建国体操ヲ踊ッテミタ』の内容に依っている。

² 第1作目の『ダンスハ體育ナリ 其ノ一 体育教師トシテノ大野一雄ヲ通シテ』は、2016年にBankART Studio NYKにて初演された。オリンピックと体操の歴史を主に扱う2作目に対し、1作目では主に女子体育と舞踊教育の歴史を取り上げた。

³ 明治神宮外苑および明治神宮外苑競技場（のちの国立競技場）の歴史や、皇紀2600年の説明は、本稿では割愛する。

て体操と行進を導入。その目的は、効率的で強健な身体の錬成と集団性の育成、言い換えれば「強い兵隊と、それを生む強い母体を作ること」（竹内：1988、241）にあった。スウェーデン体操や⁴デンマーク体操など、欧米から持ち帰った体操を取り入れるなかで、次第に日本独自の体操を作ろうという気運が高まり、とりわけ1936年から40年にかけては、全国で体操が大流行した。

その流行の契機となったのは、1940年の「幻の東京オリンピック」である。ベルリン大会開幕前日の1936年7月31日、関東大震災からの復興を掲げる東京が、次期夏季大会開催地に決定する。アジア初の招致成功に日本中が沸き立ち、スポーツブームが巻き起こった。次いで、札幌でオリンピック冬季大会、東京で万国博覧会を同年に開催することが決定したものの、日中戦争勃発に伴う国際的な緊張の高まりから、1938年7月に日本は全ての開催権を返上することとなる⁵。

戦時体制を強化する日本は、この返上の後、スポーツエリートの育成から全国民の体力増強を主眼に置いた活動へと本格的に方針転換する。そしてオリンピックに代わる大規模なスポーツの祭典として、アジア版の国際競技大会「東亜競技大会」に並んでこの年に開催されたのが、「第6回日本体操大会」である。時の文部大臣・鳩山一郎の「体操を通じての愛国総動員の実を挙げるのが、体操祭の本旨である」という発言に表れているとおり、その裏には国民精神総動員運動につながる軍事的な意図があった⁶。このように集団で行う体操を国が推進した結果、種々雑多な体操が⁷次々に考案され、レコードやラジオの普及も手伝って、流行はたちまち日本全国に広がった。1940年5月12日に開催されたこの日本体操大会には、200万人余が参加したという。

この当時盛んに行われた体操のひとつが、木野のレクチャーパフォーマンスのタイトルにもある「建国体操」である⁸。建国精神の発揚と国民精神の涵養という国家主義的イデオロギーを練りこんで、日本國民體育保健協會が草案を作成、1937年に成立した建国体操は、同年の紀元節（2月11日、現在の建国記念の日）に芝公園で披露され、先述の体操大会では、橿原神宮にて1万人

⁴ スウェーデン体操は、アメリカ留学帰りの井口阿くりらによって伝え広められ、長らく日本の学校体操の根幹をなした。全国の学校の体育館に、補助器具である「肋木」が今なお残っていることから、本体操の普及ぶりがうかがえる。井口は女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）に国語体育専修科を開設し、女子体育の指導者の養成に情熱を注いだことから、日本女子体育の母と呼ばれる。

⁵ こうして、オリンピック夏季大会は1964年（東京）、冬季大会は1972年（札幌）、万博は1970年（大阪）の実現を待つこととなる。

⁶ 1937年8月、第一次近衛内閣が「国民精神総動員」を提唱する。「挙国一致・尽忠報国・堅忍持久」をスローガンとする戦争協力の思想強化を図った。

⁷ 1938年に上野松坂屋で開催された「女子体育展覧会」の展示写真を見ると、「家庭体操」から「日の丸体操」、「薙刀体操」、果ては「看護婦体操」といったものまである。

⁸ 建国体操を集団で行う際は、行進によって入場し、体操の前後には「建国体操前奏歌」と「建国体操讃歌」を歌うことになっていた。つまり建国体操は、行進、斉唱、体操の三つからなる儀式的な「行事」であった（佐々木：2016、247-248）。

以上、明治神宮ではおよそ1100 人が行った。

『建国体操ヲ踊ッテミタ』で、木野は残存する図解から本体操を復元した。まずは前操部分を観客と共にやってみて、その特徴を実際に体感させる。威勢の良い掛け声とともに、前後・左右・上下と、直線的な動きを規則正しく力強く繰り返すその振付は、身体に程よい疲労感と充実感をもたらす。その後木野は、より動きが激しくなる後操・終操部分を、ひとりで一通り実演してから、ストリートダンス風のビートの効いた楽曲にあわせてアレンジしたバージョンを披露する。この音を変えての比較は、“簡単で、揃って誰もが行うことができる、強靱で健康な身体を作るための体操”の典型である建国体操が、今の私たちにとって必ずしも縁遠いものではないことを示唆する。ヒップホップに乗せた建国体操が、現代日本で流行する“キレッキレで完璧に揃ったカッコいいダンス”に重なり、急にリアリティを帯びて私たちに迫ってくるのである。

制服を模した衣装にキャップをかぶった高校生たちが、一糸乱れぬ応援ダンスを披露する——春の風物詩、甲子園こと全国高校野球選手権記念大会は、2015年より「ダンス篇」と呼ばれるテレビCMを作成している。なかでも、2018年の第100回記念大会のCMにおける強豪ダンス部3校の共演が話題を呼んだことは、記憶に新しい。このCMに顕著に見られる通り、今日本のダンス、とりわけ中学高校の部活動で行われているダンスは、「体操化」している。大塚製薬が2016年より実施するキャンペーン「ポカリガチダンス」も同様の現象と位置付けられよう。甲子園のCMに比べると不揃いな部分もある群舞、クローズアップの構図の多用など、個性重視にも見える「ポカリガチダンス」だが、2018年に昭和記念公園で行われたイベント「ガチダンスFES」で、4348人の中高生を集めて、CMダンスのギネス世界記録に挑んだという事実からもうかがえる通り、その裏には完璧なシンクロを目指す価値観が透けて見える⁹。テーマソングの「はしゃぎとまらぬ 頭フワフワ踊れ!」という歌詞も、なんとも暗示的だ。こうした大人数による完璧に揃った群舞¹⁰を無邪気に練習する若者たちの姿はそのまま、建国体操を始めとする集団体操を楽しんで実践していた人々の姿にオーバーラップする。

このほか木野は、古事記や日本書記に想を得て作られた「日本体操（やまとばたらき）」や、建国体操をベースに武道の動きを取り入れた「くろがねの力」といった体操を実演する。このような、1940年当時の日本で流行した体操が作る身体は、規律化されており、集団の秩序を乱さない

⁹ 「TVコマーシャル向けに同時に踊った最多人数」のギネス世界記録を達成。2018年7月6日付の同イベントのプレスリリースによると、ギネスの達成条件は次の3つであったという。(1) 1つの会場に集まった参加者が、振り付けをされ、シンクロされたダンスを最低1分間踊る。(2) 正しい振り付けで同時に踊ることができなかった参加者は記録の合計数から除外され、最終合計人数が最低条件の2198人以上である必要がある。(3) その後参加者全員が同時に踊る場面がTVコマーシャルに使用され、放映されたことを証明。(URL: <https://kyodonewsprwire.jp/release/201807055718> 2020年3月29日最終閲覧)

¹⁰ 今日の画一的な群舞の大流行には、日本体育大学の伝統芸「集団行動」の人気も少なからず影響しているように思われる。その創始者清原伸彦は、2014年ソチパラリンピック開会式における集団行動も演出指導した。

律動する身体、つまり国家の求める管理しやすい身体であった¹¹。そこでは生産性や効率性のために、「正しい」「美しい」「強い」「健康」「標準」といった一元的な価値観のもと、諸身体が統制されてゆく。

大日本帝国憲法下の「滅私奉公」の身体

「日本体操（やまとばたらき）」の解説の末尾に、以下のような文言がある。

身體は神様の在します宮殿の如くなり、己即ち神となる。己即ち神となつてかしこき天皇の神の御代祝しまつらねばならぬ。

体操を通じて、個を滅し、「神」という虚構の身体への同一化を試みる。それは、神話というフィクションに基づいて人々の身体が振り付けられていく、とも言い換えられるだろう。事実、大日本帝国憲法下の日本では、現人神たる天皇を戴く「国」の身体、つまり「国体」という架空の身体が何より重んじられ、個人には、国のために自己を犠牲にして尽くす滅私奉公が求められた。時の文部省が学者たちを結集して編纂した『国体の本義』の冒頭には、次のようにある。

大日本帝國は、萬世一系の天皇皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ、我が萬古不易の國體である。而してこの大義に基づき、一大家族國家として億兆一心聖旨を奉體して、克く忠孝の美德を発揮する。これ、我が國體の精華とするところである。この國體は、我が國永遠不變の大本であり、國史を貫いて炳として輝いてゐる。而してそれは、國家の發展と共に彌々鞏く、天壤と共に窮るところがない。我等は先づ我が肇國の事實の中に、この大本が如何に生き輝いてゐるかを知らねばならぬ。（文部省：1937、9）

“万世一系の天皇が統治する一大家族国家である日本”という共同幻想の中で、「我等」という実態の定かでない集団意識が誕生する。皆で同じ動きを行う一体感を通じて、国民というナショナルな共同体意識を植え付けることができる体操は、その形成に大きく貢献したに違いない。齊一化した「我等」の身体はそして、日中戦争から太平洋戦争へと駆り出されてゆくのである。

日本国憲法をテキストとして用いたソロパフォーマンス作品『俺が代』で話題を呼び、今回のどらま館企画2019「憲法と身体」では大日本帝国憲法（1889年）と現行憲法（1947年）の前文を音読するという試みを行った萩原雄太は、テキストの文体が読み手の身体の状態を規定すること

¹¹ 近年の「世界体操祭」の様子からわかる通り、今日「体操」は大きく進化し、かつてのような画一的なものではなくなりつつある。この点については稿を改めて述べたい。

を指摘した上で、前者・大日本帝国憲法が求める身体を「四角」になぞらえる¹²。四角は積みやすいが柔軟性にかかけ、面への衝撃には強いが、角への衝撃には非常に弱い。大日本帝国憲法の硬質な文体が求める強張った身体もまた、同様である。直線的で筋肉を固めるような身体の使い方は——全身を突っ張った状態と、足首や膝、股関節を緩めた状態のうち、どちらが押されたり揺れたりした際の衝撃に耐えられるかを想像するとわかりやすいかもしれないが——強そうに見えて実は脆い。それが集団となればなおのことだ。一定方向にベクトルを向ける画一的集団は、手薄なところを突かれると、いとも簡単に崩壊してしまう。

つまり大日本帝国憲法下の「強さ」とは、管理の効率性に偏った一面的な強さでしかない、と萩原は考察する。「公」の意識を内面化した、没個性的な滅私奉公の身体は、非常に脆い。真の強靱さはむしろ、武術の達人のように余分な力が抜け、全方位に意識を張り巡らせた柔軟な不定形の身体、そしてそのようなしなやかさを備えた多様な「個」の集合体に宿るのである。

戦後訪れた「個の時代」と体育

戦後になり、体育教育は個の尊重へと大きく舵を切った。1947年に学校体育指導要綱を制定、「生命の尊厳性を認識し、個性の発展を企図するという民主的教育の本義」に基づき、「劃一的体育から個別体育へ、強制的体育から自発的体育へ、一部の者の体育から全体の体育へ、思いつきの体育から計画の体育へ、体育の時間だけの体育から生活全体の体育へ」の転換が謳われたのである（文部省体育課長：1948）。

ひとりひとりの個性や主体性を重んじること、一元的な価値基準を廃し複数の基準を設けること、教えることよりも引き出すこと、様々な動きの経験から自分の身体の可能性を自ら開発する能力をつけさせること——これらはいずれも、戦後の体育教育が目指してきたことである。しかし今なお、多くの現場で理念との乖離が起こっているのが実状だ。

隊列行進や体育座り、「気をつけ」「前へならえ」「休め」といった号令など、軍隊式の身体教練の名残でありながら、2020年の今も当たり前のように行われている規律訓練には、個の主体性を発揮することよりも集団の秩序に従うことを求める姿勢が表れている¹³。このことが現代の身体表現に与えている影響は少なくないだろう。2008年の学習指導要領改訂により中学校で必修化したダンスにおいてもまた、皆で揃えることを過度に重んじる傾向がしばしば見受けられる。その結果、運動神経の良し悪しによる差がますます開き、身体を動かすことへの苦手意識を子ども達

¹² 以下、萩原の発言は全て、早稲田小劇場どらま館企画2019「憲法と身体」の枠内で行われたトークイベント〈『俺が代』と「憲法と身体」〉（2019年8月9日）より。

¹³ とはいえ、このような集団行動の練習は、避難訓練の際に大いに役立っている。地震大国であるこの国で規律訓練が重んじられるのは、防災上の理由もあるかもしれない。

に植え付け、強化してしまうことも少なくないようだ。そして戦後GHQが危険視した「ラジオ体操」は、変わらず小学校の夏休みの定番で、最も参加者数の多いスポーツのひとつであり続けている¹⁴。

その一方で、教育学研究者の樋口聡が「画一性に身を委ねてしまう快楽を、ラジオ体操はシンボル化している」（樋口：2019、246）と形容するとおり、揃いの動きを集団で行う一体感がもたらす快感を否定できないのも確かである。体操やダンスには、周りにつられてやっているうちに、身体の共振による集団的エクスタシーに飲み込まれてゆくという特質がある。合唱にも通ずる、すべてがあるべき場所にピタリとはまった時の気持ち良さ、個の輪郭が消失して周囲と一体となるような高揚感、そして全身を使って動くことによる充実感。個々人のうちに湧き上がるこの生理的快感こそが、集団行動が持つ面白さでもあり、危うさでもある。先の大戦後、斉一的な群舞（ユニゾン）を忌避してきたヨーロッパとは対照的に、日本では、群舞への批判が特段起こることなく今日まで来た。そして現在では、中高生や企業の社員が一丸となって練習を重ねた群舞を披露するCMが、テレビには溢れかえっている。

再び「公の時代」へ

この現象は、現代日本社会の全体が、戦後民主主義のうちに花開いた個性尊重の時代から、昭和初期のような公の論理を重んじる時代へと回帰しつつあることにも関係するだろう。この点について、「公共空間」の概念をラディカルに問い直す作品を発表してきたアーティスト集団Chim↑Pomのリーダー卯城竜太は、次のように語っている。

ぶっちゃけ僕らより下の世代は戦後のマインドよりも、どっちかっていうと戦前にシンパシーを感じる人も多いと思う。だって戦後民主主義の個性尊重の社会は、大阪万博時の岡

¹⁴ 1945年10月22日付でGHQが発した「日本教育制度ニ対スル管理政策」において、「軍国主義的及び極端なる国家主義的イデオロギーの普及を禁止すること、軍事教育の学科及び教練は凡て廃止すること」が示された。ラジオ体操については、ラジオから流れる号令のもとに全国民が体操する点が、全体主義を彷彿とさせるとして問題視された。アメリカ側からの提案も受け、1946年4月に伴奏曲を変更し号令も廃した新たなラジオ体操（二代目）が誕生、しかし従来のものに比べて振付が難しかったこともあり、定着しないまま廃止される。その後1951年に、今日まで続く三代目ラジオ体操が制定される（佐々木：2016、347-349）。このように、ラジオ体操自体も時代によって変化し、今日では、かつてのような型の統一はそこまで求められず、よりゆるやかな形で行われている。だが、樋口聡も指摘する通り、ラジオ体操に典型的に表れている「皆がやっているものだから何となくつられてやってしまうという『共振現象』に基づく日本人の行動の仕方」（樋口：2019、245）が、時代が違えば何を起こしうるか、私たちは過去に学ぶ必要がある。佐々木によれば、三代目ラジオ体操が制定されたのは、ちょうど日本が独立を回復し、敗戦直後の規制が緩和されて戦前からの取り組みが各所で再開された時期に当たる。54年には、中断されていた「日本体操大会」が、「第一回体操祭」として復活（68年に中止）。「戦前からの連続性」がこの時すでに蘇っていた（佐々木：2016、351-356）。

本太郎が好例だけど、「公」自体がエクストリームな個性を求めてたでしょ？（...）いまはそんな「個のエクストリーム」に人々が社会性やモラルを求め、公権力は検閲をかける。つまり、社会全体が個性尊重の「個」の時代から、公尊重の「公の時代」とでも言うべきものになってしまっている。（卯城：2019、22）

戦後民主主義の機能不全が可視化し、憲法事情は後退し、もはや「民主主義」というもの自体にリアリティを持てなくなりつつある。学校教育においても、「公共の精神」や「道徳心」の名の下に画一的価値観を押し付ける全体主義的傾向が強まっていることは、教育の専門家たちが指摘する通りだ¹⁵。

そもそも日本の「公（公共）」という語は、欧米の「パブリック」とは同義ではない。日本における「公共」は、第一に「公権力」と「皆」という言葉に結びついており、「個の集合体としての公」という意味合いは極めて薄い。それは、「おおやけ（公／大宅）」という言葉が元来朝廷や政治を意味していたこと、加えて「個人」や「自由」「権利」が明治期に輸入された西洋由来の概念であり、民衆がボトムアップで勝ち取ったものではなくトップダウンで授けられたものであることにも由来する。それゆえに、公共を突き詰めていけば「滅私奉公」へと行き着いてしまうのである。その意味では、日本では未だかつて、真の「パブリック」は実現していない。

民主的身体の価値

民主主義そのもののあり方が問い直されている今、上述のような公共概念を反転させ、個をベースにした新たな「公」を作り上げる必要に迫られている。その構築に大きく寄与しうるのが、私たちひとりひとりが持つ身体である。

哲学者ジュディス・バトラーは、著書『アセンブリ: 行為遂行性・複数性・政治』の中で、「複数の個の身体が集まる」こと自体が持つ力について言及する。たとえ何もしていなくても、各々別のことをしていても（do）、複数の個の身体がそこに共に存在する（be）という事実は、「多様な個がありのままに存在することを許されている」という強いメッセージを発する。そして「『私』は、ありえない統一体に融合されることなく、同時に『私たち』となる」（バトラー：2018、70）——個の捨象や同一化とは対極にある、個の複数性を保ったままの連帯が、この時実現されるのである。

ここで私が思い起こすのは、ドラマティーチャー石井路子が行っている授業である。2013年（いわき総合高等学校）と2017年（追手門学院高等学校）の2度だけだが、授業を見学し、生徒たちの

¹⁵ この点は『すばる』2019年7月号の特集「教育が変わる 教育を変える」に詳しい。

柔らかで余分な力の抜けた身体に心底驚かされた。

中でもとりわけ印象的だったのは、違いを持った「個」同士が互いに相手を尊重しながら「全体」を形作るという発想を、身体を通じて実現していた点である。重力、摩擦、慣性の法則などを用いてパートナーとの接触を保ちながら即興的に動く「コンタクト・インプロヴィゼーション」をベースにしたワークを通じて、自分の意思だけではどうにもならない相手＝他者の存在を知り、自分を知る。その際、通常の体操のように同じ背格好の者同士で組むのではなく、性別や体格に関係なく組むことで、都度目の前の相手の身体感覚や重さを想像し、関係を探り、絶えず構築し直していく姿勢が自然と身についていく。そこでは、運動神経や柔軟性の有無は関係がない。身体的な対話の中で自己の特性や役割を流動的に見出し、他者を認め、過不足を互いに補い合うことで全体のバランスを取っていくその姿は、まさにしなやかな「民主的身体」を思わせる。

「抑圧的な権力関係は身体に記号化されているがゆえに、それらは別の身体的実践によって変化させられる可能性を持つ」（シュスターマン：2019、178）とは哲学者リチャード・シュスターマンの言葉だが、実際、身体教育はそのあり方次第で、私たちを全体主義にも個人主義にも導きうる。石井の教育は、身体的学びによって社会文化的な刷り込みを書き換えることこそが、「個の身体」を取り戻し、個が公へと接続する「新たな公」、すなわち真の民主主義を実現するための有効な手段であることを、身を以て示している。

しなやかな生に向けて

ダンスもスポーツも社会に利用されつつ発展してきた。教育とは社会に合う人間を作り出すシステムで、知らず知らずに影響を受けてしまうものだからこそ、知る必要がある。

（『建国体操ヲ踊ッテミタ』 2018年初演時のプログラムノートより）

木野彩子は、レクチャーパフォーマンスの中で、3つの行進の映像を比較する。新国立競技場が建つ明治神宮外苑の地でかつて行われた、1943年の出陣学徒壮行会と1964年の東京オリンピック開会式、そして東京へと五輪旗が手渡された2016年のリオオリンピック閉会式である。64年大会の日本選手団の一糸乱れぬ歩きぶりが、学徒出陣を思い起こさせるのに対し、16年大会では選手団は皆自由に、時にはスマートフォンで自撮りなどしながら、リラックスした様子で歩いている。木野は指摘する——これが、この50年で私たちが手に入れてきた身体であるはずだ、と。

日本国憲法のもとで守られてきた「個人の尊厳」の基盤たる「個の身体」は今、危機に瀕している。『建国体操ヲ踊ッテミタ』は、体操のような斉一的集団行動が作り出す直線的で強張った身体と、それが引き起こす思考停止の状態に、警鐘を鳴らす。一致団結、皆で一生懸命に練習して頑張ることは、美しくもあるが、危険でもある。できない者は責められ切り捨てられ、できる者

が力を持ち、集団の論理の中に個を埋没させ、皆が妄信的に突き進んだ結果何が起こったか、先の大戦は如実に物語っている。

際立った個性が評価された「個の時代」から、同調圧力が高まり、出る杭は打たれる「公の時代」に再び接近しつつある2020年現在——木野がレクチャーパフォーマンスで、あるいは石井路子が草の根的な教育活動の中で提示するとおり——多数派の論理に絡めとられない、自立したしなやかな「個の身体」を育む重要性は殊更に増している。自己の身体は、混迷する世の中を生き抜いていくためのたしかな拠り所となる。そして何より「個の身体」は、ただその存在をもって、民主主義の根幹たる自由と平等の原理、そして人間の尊厳を体現し、行き詰まりつつある近代的価値観を乗り越える道を示しているのである。

追記：

本稿は2020年3月、コロナ禍により東京オリンピックの開催が揺れる中で執筆した。5ヶ月を経て、状況は大きく変わってしまった。(2020年8月、酷暑の東京にて)

【主要参考文献】

卯城竜太、松田修『公の時代』、朝日出版社、2019年。

坂上康博、高岡裕之『幻の東京オリンピックとその時代：戦時期のスポーツ・都市・身体』、青弓社、2009年。

佐々木浩雄『体操の日本近代：戦時期の集団体操と〈身体の国民化〉』、青弓社、2016年。

高橋秀実『素晴らしきラジオ体操』、草思社、2013年。

竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』、筑摩書房、1988年。

ジュディス・バトラー『アセンブリ：行為遂行性・複数性・政治』、青土社、2018年。

シンシアJ・ノヴァック『コンタクト・インプロヴィゼーション 交感する身体』、フィルムアート社、2000年。

樋口聡、グンター・ゲバウア、リチャード・シュスターマン『身体感性と文化の哲学：人間・運動・世界制作』、勁草書房、2019年。

兵藤裕己『演じられた近代：〈国民〉の身体とパフォーマンス』、岩波書店、2005年。

舞踊文化と教育研究の会編『松本千代栄撰集 第1期』(1)～(5)、明治図書出版、2008年。

舞踊文化と教育研究の会編『松本千代栄撰集 第2期 (研究編)』(1)～(3)、明治図書出版、2010年。

森貴史『踊る裸体生活：ドイツ健康身体論とナチスの文化史』、勉誠出版、2017年。

文部省編『国体の本義』、文部省、1937年、URL: <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1219377> (2020年3月22日最終閲覧)。

文部省体育課長「学校体育指導要綱に就て」、『新体育』1947年6-7月号、新体育社、1947年、pp. 1-

6。

『すばる』2019年7月号、集英社、2019年。

Sally Banes, *Democracy's Body: Judson Dance Theater, 1962-1964*, UMI Research Press, 1983.

Shintaro Fujii, "Le théâtre japonais au prisme des notions de « public » et de « privé »", in Shintaro Fujii, Christophe Triaud (éds), *Alternatives théâtrales*, numéro hors-série, « Scène contemporaine japonaise », 2018, pp. 5-11.

木野彩子『ダンスハ體育ナリ？其ノニ 建国体操ヲ踊ッテミタ』公演プログラム、2018年。